

平和への道

甲南中学校 一年 児美川 恵美

「アフガニスタンにランドセルをおくってみない。」

卒業を控えた小学六年生のことです。担任の先生が私達に声をかけてきました。なぜランドセルを、しかも送料は自己負担といいたす。ランドセルを使い終わるとはいえ、なぜそこまでしておくらなといいけないのか気になり、アフガニスタンという国について調べることになりました。

学校が爆弾によって破かいされ、がれきに囲まれた中で一生懸命学ぼうとする子ども達の姿に衝撃を受けました。アフガニスタンは、二十年以上に渡る侵略や内戦などにより、ダメージを受けてきました。食料も不足し、五十%の子どもが栄養不良だそうです。それに比べ、私はどんなに恵まれているのだろうか。暑い日はクーラーをガンガンつけ、冷蔵庫を開ければ食べ物が入ります。今の平和な日本に住んでいる私は、当たり前前のことが当たり前ではない人達がいることに気付かされました。

今年も八月十五日、終戦記念日を迎えました。新聞を見ると、お年寄りの戦争体験や平和への願い、鹿児島でも米軍の上陸計画が多くあったことなど戦争や平和にまつわる記事が多く目につきました。それを見ると昔の日本もアフガニスタンと同じ状況があった事に気づきました。戦争や平和についてほとんど考えていなかった私は驚きでした。

それでも私には戦争が実際にあったことは想像できませんでした。しかし、先日祖父の家を訪ねたとき考えが変わりました。部屋の片隅に軍服姿の男性の写真が飾られていました。

「じいちゃん、これは誰？」

私が聞くとその人は私の曾祖父で、徴兵制で本土からはるか遠く離

れた硫黄島というところに行っていたと初めて知りました。残念ながら曾祖父は、三十一歳の若さで戦死したそうです。暑い夏に遠く離れた南の島でどんな気持ちだったのだろう、食べ物はあったのだろうかと考えるうちに、いたたまれなくなりました。祖父に聞くと遺骨もなく、政府からは現地の土だけが送られてきたそうです。

「戦争は絶対にしてはいけない。」との祖父の言葉が心に響きました。私は初めて戦争が自分とは無縁では無いと感じました。

しかし、日本で戦争や平和が当たり前のように語られるのは、八月の限られたときだけです。しかも日本人がいかに大変な思いをしたか、日本がどんな被害を受けたのかということばかりに目が向けられます。世界に目を向けると、アフガニスタンだけではなく紛争が後をたちません。毎年、何万人もの人々が武力紛争で命をおとしているといえます。実際の戦争にならないまでも、米国と中国の経済的な対立など不安の種はつきません。

なぜ、世界はこのように争いがあふれているのでしょうか。その一つには、私達が自分の国のことしか考えないからだと思います。私はつい、自分の立場ばかり考えて他人の気持ちを思いやることのできないときがあります。それが家族や友人とのめぐりの原因になっていきます。国のレベルでも同じではないでしょうか。自分の国の利益ばかり考えて他国の立場を考えないから、紛争や対立につながるのだと思います。

戦争は昔のことでも、自分に無関係なことでもありません。今も世界のどこかでおきていることなのです。まずは、私達一人一人がもっと世界でおきていることに関心を持ち、相手の立場を理解することが平和への一歩につながると思います。